

「進化する高専」 共同教育とグローバル人材の育成



独立行政法人 国立高等専門学校機構 理事
木谷 雅人

高専制度創設 50 周年を目前にして、私たちは「進化する高専」をキャッチフレーズとして、様々な取組を推進しています。高専は現在各方面から極めて高い評価を受けていますが、それは諸先輩及び現在高専教育に携わっているすべての教職員が、常に時代を先取りして社会や産業のニーズに応える改革の努力を積み重ねてきた結果です。「進化する高専」にはそのような意味が込められているものと私は理解しています。

それでは、現在の改革の方向性は何か、私はそれを「共同教育」と「グローバル人材の育成」を柱とした「高専教育の高度化」であると考えています。

「共同教育」

産学連携による実践的な教育は高専創設当時から理念に基づく高専の強みであり、その強みを意識的にさらに深化・強化させた形が「共同教育」です。従来からあるインターンシップや企業技術者講師による授業をさらに発展させたもので、地域や企業の現実の問題に立脚した課題を設定し、その解決に向けて、多様な専門的背景を持つ学生がチームを組んで、アイデアの提案から実際のものづくりに至るまで取り組む、その過程で高専の教員と企業の技術者が共同して指導に当たる、それが理想型だと考えています。これらを通じて、現在の技術者に求められる創造的な実践性、複眼的な視野、チームワーク力、マネジメント力などを身に付けさせるものです。これを教育手法という観点から見れば「PBL」となり、育成しようとする能力から捉えれば「エンジニアリングデザイン教育」となるでしょう。既に多くの高専で先導的な取組が進められていますが、国立高専機構としても全高専の学生を対象としたプログラムの開発に努めています。私自身も、8月末に、今年からオムロン社の協力を得て開始した回転寿司プロジェクトの様子を拝見して、短期間のうちに学生が大きく成長した姿に感銘を受け、その効果を実感しました。今後とも、こうした取組の普及発展に努力したいと考えています。

「グローバル人材の育成」

もう一つの柱が「グローバル人材の育成」です。いうまでもなく今日の社会や産業のグローバル化の進展は著しく、規模の大小を問わず企業のマーケットや生産拠点の海外展開が進展し、国際的に活躍できる技術者の育成が急務となっています。しかし、英語力やコミュニケーション能力は、従来他の点では高い評価を受けてきた高専にとって大きな弱点と見られてきました。このため、近年高専では TOEIC の活用や英語によるプレゼンテーション・コンテストの実施などを通じて、これらの能力の向上に努めていますが、何といても学生に国際的な活動の現場を実体験させることが、国際感覚を身に付けさせモチベーションを高めるために最も効果的です。3年前から多くの企業の協力を得て開始した海外インターンシップや今年から開始される国際学生シンポジウム (ISTS) は、こうした観点から発案されたものです。最近若者の内向き志向がよくいわれますが、これらの取組を進める中で、学生に対して十分な環境や機会を整備すれば決してそのようなことはないこと、また高専の学生は十分に国際的に活躍できる潜在力を有していることが明らかになってきていると思います。海外からの留学生の受け入れや長期・短期の学生交流も、技術者養成に関する国際貢献になるだけでなく、日本人学生に刺激を与えその国際性を養う上に大きな意義があり、アジア地域を中心に海外の教育機関との交流協定を締結し、そのネットワークを活用して充実に努めていきたいと考えています。

国立高専機構としては、以上の二つを大きな柱として様々な取組を進めていますが、各高専においても、それぞれの地域や産業界の特性やニーズに応え、特色ある取組の充実を図っていただくとともに、それらを共有化することにより、全体としての「高専教育の高度化」が進展することを期待しています。